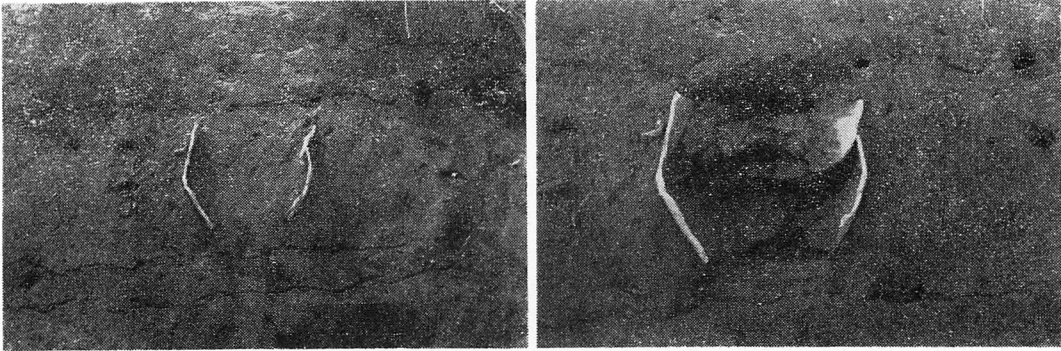


高木正文



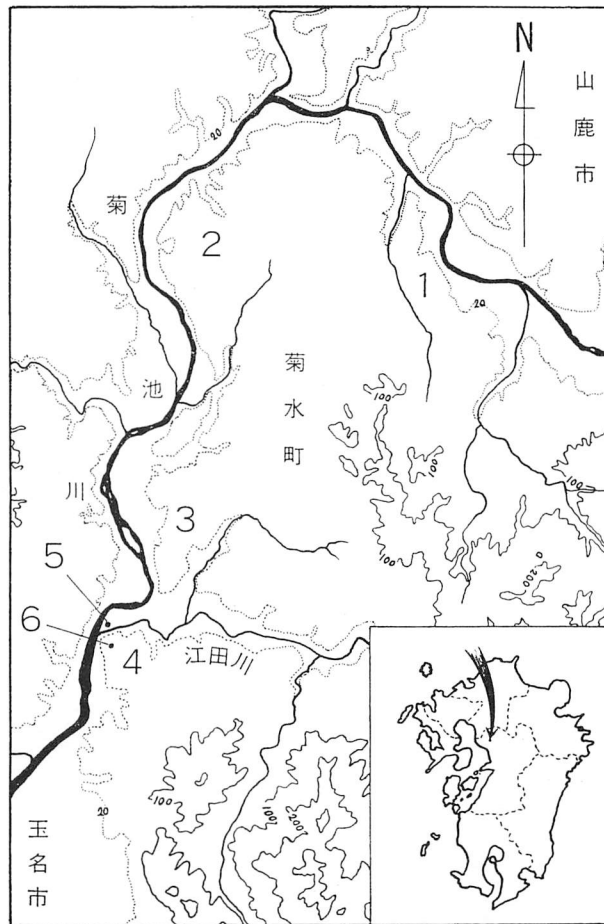
第1図 熊本県清原遺跡出土カメ棺

1. はじめに

ここに紹介する縄文時代カメ棺は熊本県玉名郡菊水町大字江田清原から出土したものである。

菊水町を菊地・阿蘇スカイラインが通ることになり菊水～玉名間の道路拡幅工事が進められていた昭和45年6月のこと、熊本県下の遺跡踏査を势力的に続けていた横田浩氏は清原の道路崖面に縦切りされた状態で縄文時代カメ棺が出土しているのを発見、菊水町教育委員会、同町文化財保護委員会に連絡された。調査はたまたま大学から帰郷した筆者が行なうことになった次第である。

熊本県の北部には阿蘇外輪山に源を発する菊地川が有明海へと注ぎ、上流に菊地、中流に山



第2図 遺跡所在地位位置図

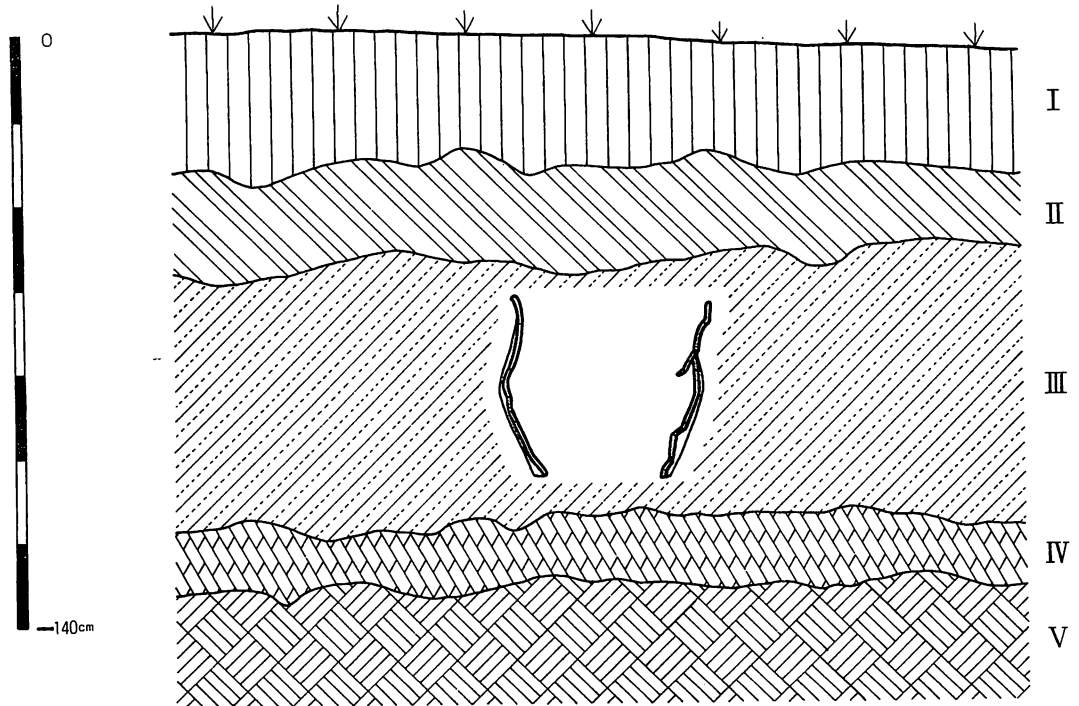
- 1 高野古閑遺跡
- 2 赤穂原遺跡
- 3 諏訪原遺跡
- 4 清原遺跡
- 5 若園貝塚
- 6 船山古墳

鹿、下流に玉名と肥沃な沖積平野を形成している。菊水町は山鹿市と玉名市の間に位置し、町内では菊地川左岸に洪積丘陵の発達がみられ、上流から高野古閑、赤穂原、諏訪原、清原と縄文時代後、晩期の遺跡も多い。清原の北には江田川が流れ、南流する菊地川との合流点には縄文時代中・後期の若園貝塚⁽¹⁾もある。これは熊本県で現海岸線から最も奥にある鹹水産を主とする貝塚として知られている。また弥生時代の諏訪原後期住居跡群、古墳時代の国指定史跡船山古墳をはじめとした考古学的に重要な遺跡も多い。

2. 出土状態

このカメ棺が出土した丘陵は部分によって清原、清水原、松坂原などと異なった呼び名をもつがここでは総称して清原丘陵と呼ぶことにしたい。清原丘陵は南北約600 m、東西約500 mの広さを持ち、先述した船山古墳も同丘陵上の北西よりにある。

カメ棺は丘陵のほぼ中央部から出土した。層位は第Ⅰ層表土(約30cm)、第Ⅱ層黒色土(約25cm)、第Ⅲ層茶褐色土(約60cm)、第Ⅳ層黒褐色土(約15cm)、第Ⅴ層明褐色土で、カメ棺は第Ⅲ層の茶褐色土中から出土した。発見当時、カメ棺は土圧でこわれ、また道路工事で半分近くを失っていたが、残存部からはほぼ埋置状態を知ることができた。



第3図 地層断面図

墓壙の確認は棺内外とその周辺の土に全く変化がみられなかったので不可能であったが、墓壙の底面のみは壙の大きさだけ固められていたので確認できた。底部を故意に欠いた土器を棺とし、固めた墓棺底に垂直に置き、棺の外面に接して直径13cm程の礫を2個置いてあった。棺内に人骨の遺

存や副葬品はなかったが、出土状態からカメ棺とみてさしつかえあるまい。棺蓋の破片はなかったので単棺であったことが知られる。

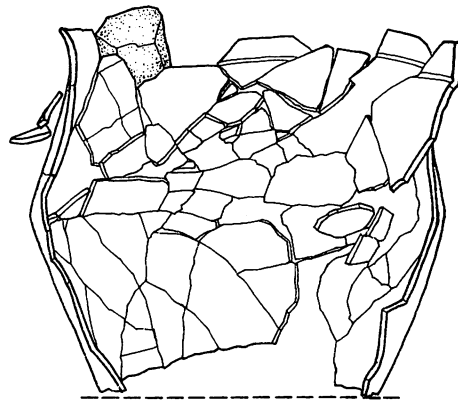
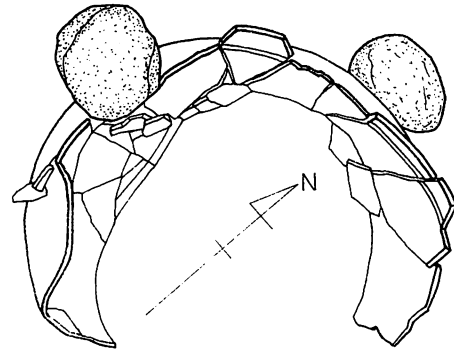
3. カメ棺

カメ棺は外反した上に5本の平行沈線文をもつ「たが」状の粘土帯を継ぎたした口縁部と「く」字形に屈折する胴部を特徴とする口径40cm、胴部最大径43cm、現高47cmのやや大型のカメ形土器を使用している。胎土は細かく、砂粒の混入は少ない。大きさに対して器壁の厚さがわずか0.7cmであることは胎土の良好さを物語っている。成形はヘラによって縦方向に研磨を施しており、下方では雑な研磨となっている。焼成はやや良好で、色調は全体的に暗褐色を呈する。

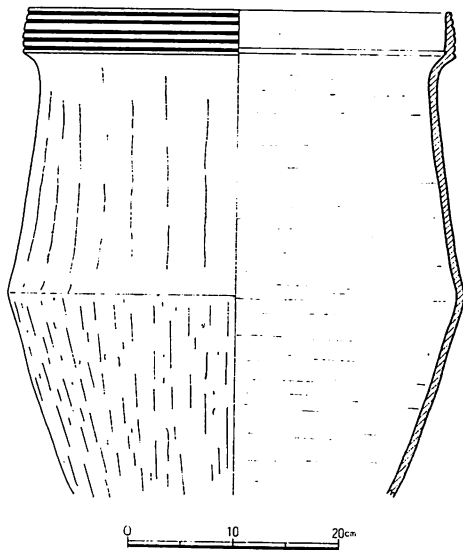
これらの諸特徴からこのカメ棺は賀川⁽³⁾編年の縄文晩期Ⅰ式土器に比定することができる。

4. おわりに

ここで清原丘陵の中央部から出土した縄文時代晩期カメ棺の一例を紹介した。この出土地点付近からは畑耕作中に同種の土器破片が出土すること



第4図 カメ棺出土状態



第5図 カメ棺実測図

があり、晩期における墓域を形成していたことも考えられる。またカメ棺出土地点から約50m東方では昭和48年添夏喜氏の調査で晩期の住居跡が確認されていることも興味深い。

九州では縄文時代後期後半頃にカメ棺が出現することが知られている。この時期は土偶出現期、打製石斧の増加期、土器器形の多様化する時期でもある。これら遺物の変化は社会の変化とみられ

る。カメ棺葬出現は社会変化にともなって、社会制度の葬制が変化したとみるべきであろう。
末尾ながら、ご助言をいただいた賀川光夫・隈昭志の両先生に心から謝意を表します。

〔注〕

- (1) 三島 格 (1965) 「縄文文化」熊本県史総説篇
- (2) 緒方 勉 (1971) 「諏訪原遺跡発掘調査概報」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査概報
- (3) 賀川光夫 (1969) 「(縄文晩期文化)九州」新版考古学講座 3